

原 著

VERAC-性格検査の標準化
—気質類型・性格特性統合理論にもとづく
性格検査作成の試み—

若 林 明 雄*

THE STANDARDIZATION OF VERAC PERSONALITY INVENTORY

Akio WAKABAYASHI

The purpose of the present study was a) to investigate the structure of personality types and traits, b) to construct and standardize a personality questionnaire which was based on that structure and c) to examine validity and credibility of that questionnaire.

First, five hundred male and female undergraduate students were asked to answer ninety items which were selected from many questionnaires. The collected data were analyzed by the principle component analysis and rotated by the varimax method. We found two factor solutions as follows, 1) three factors solution: factor 1 was cyclothymic personality, factor 2 was schizothymic personality and factor 3 was epileptic personality.

2) five factors solution: factor 1 was extro-introversion, factor 2 was emotional stability, factor 3 was rationality, factor 4 was activity and factor 5 was cautiousness.

Then, we constructed a questionnaire which based on that two factor solutions, and standardized that. This questionnaire could classify personality types and measure common personality traits. We named this questionnaire VERAC personality inventory (VPI).

Finally, we examined credibility and validity of VPI. The credibility was confirmed by test-retest method. And the validity was confirmed by concurrent validity which was given from correlations between VPI and Y-G test, INV and MPI.

パーソナリティを理解し、説明していこうとする方法には、多様なアプローチがあるが、その代表的なものとして、類型論と特性論がある。この両者は、いずれもパーソナリティを記述する方法論の1つであるという点では共通しているが、その理論的背景は大きく異なっている。すなわち、類型論は“人間を統一的に把握しようとする情熱”（依田；1968）を背景としてもっており、人間の特性間に意味のある連関（パターン）を仮定してい

る。このパターンが類型として認知されるのである。この類型というパターンについて、Rohracher (1953) は“様々の個別特徴が偶然に寄り集まっているのではなく、互いに内的に関係し合い、相互に規定し合っている”と記述している。これに対して特性論は、すべての人間に共通する特性を設定し、その特性次元上へのプロフィールによって個人のパーソナリティを記述する。従って、個人差を程度の差として位置づけていることになる。こ

* 日本大学文理学部

Department of Psychology, College of Humanities and Sciences, Nihon University

の点が類型論との最も基本的な相違点であろう。類型論では個人差を質的な相違として考える傾向があるからである。

さて、このようなパーソナリティ記述の方法論を具体化したものに、質問紙法性格検査がある。ところが現在使用されている質問紙法性格検査の多くは、共通特性論の立場にもとづくものであり、類型論によるものは少なくなっている。これには様々な理由が考えられるが、最も根本的なものは、検査作成上の技法にかかわる問題であろう。共通特性論の立場をとる代表的な心理学者のEysenck (1964) は、特性について次のように述べている。“特性というものの本質的な特徴は、同じ特性の異なった現われの間にみられる合致ないしは相関である。従って、ある特性が仮定されると、まずなによりもさまざまな文脈におけるその特性のさまざまな現われが、互いに相関しているかどうかを調べなければならない。……もし社交性という特性が存在するならば、社交性に関する質問に対する回答や、それに対応する実際場面における反応は、明らかに高い相関を示すはずである”以上の記述から明らかなように、さまざまな状況において、想定された特性の多様な現われが、多人数の集団において確認（保証）される手続きから共通特性が設定されることになる。このような考え方を、質問紙法性格検査の項目配置でみると、各特性に割当てられた項目への反応の相関によって尺度を構成していくことになる。こうした作業は具体的には因子分析によって行われることが多い。近年の因子分析技法の発展と、その使用が容易になったことなどから、共通特性論にもとづく質問紙法検査が次々と作成されることになったと思われる。これに対して、類型論を理論的背景にもつ検査では、共通特性論にもとづく検査のような作成手続きをとるものは少なく、より経験的、直観的に項目群が選ばれ、尺度が構成されている。このような作成上の手続きを比較すると、共通特性論にもとづく検査の方が、より科学的であり信頼できると受けとめられる傾向があるといえよう。こうして、共通特性論による性格検査の繁栄と類型論による性格検査の衰退が生じてきたのである。しかし、このような傾向が、そのままパーソナリティ研究における類型論の有用性の低さを意味するものでないことはいうまでもない。精神医学や臨床心理学の分野では、今なおパーソナリティ理解の手段として類型論的な考え方が重要な位置を占めているのである。

ところで、類型論と特性論は、理論的な見地からみれば一見相互に対立する方法論をもってはいるが、実際には、両者は相補的な関係にあるものと思われる。それ

は、両者のもつ問題点が相互補完的性質をもつことから明らかである。したがって、パーソナリティ研究においては、類型論と特性論が何らかの形で統合されなければならないといえよう。このような考え方は、すでにEysenck (1953) や肥田野 (1967) によって示唆されており、若林 (1982 a) によって別の観点からその可能性が確認されている。このうち、前二者は特性水準の上位概念として類型を想定しているが、若林はフラクタル性 (Mandelbrot; 1977) の概念を適用して理論的に説明している。つまり若林は、パーソナリティを記述する場合には、まずその個人が属する類型を示し、その上で基本的な特性についてのプロフィールを描くべきであると述べている (若林; 1985)。したがって、ここでは同一の類型に属する個人間でも違った特性プロフィールを描く場合があるし、別の類型に属している個人同士が類似した特性プロフィールを描く場合もあると考えられるのである。

本研究では、このような理論的背景をもとに、類型論と特性論の統合をめざした質問紙法性格検査の作成と標準化について検討していく。

研究 I

目 的

パーソナリティの類型と特性との両方を測定しうる質問紙法性格検査を作成するため、Eysenck のいう習慣的反応水準に対応する質問項目を大規模に収集、整理することによって、基本となる尺度を見出す。

方 法

質問紙法性格検査を用い、その回答を因子分析することによって、基本的なパーソナリティの次元を抽出する。

因子分析にけるデータを収集するために使用する質問紙の項目の選択は、以下の手続きによって行われる。

1) Y-G 性格検査、精研式パーソナリティ・インベントリー、MPI、TPI の項目を整理し、ほぼ同一の質問内容のものは1つにまとめるとともに表現を統一した。この手続きによって残された342項目からなる質問紙を、大学生文系、理系男子各200名に実施し、その回答をもとに、各項目別通過率および項目間相関を求め、その結果から項目の修正、削除を行い、160項目の改訂版を作成した。

2) この改訂版を大学生男子518名に実施し、回答をパターン分析した結果、9クラスターに分類された。この結果をもとに、項目全体がパーソナリティの全側面をほぼ網羅するようにして90項目を選択した。これを表1

表 1 因子分析された90項目の内容

1. 交際がへたなほうである
2. 自尊心を傷つけられると、ひどく腹がたつほうである
3. ひとと会ったとき、適当な話題をみつけるのに、骨がおれないほうである
4. 仕事はひとより早いほうである
5. 正しいと思うことは、まわりにかまわず実行するほうである
6. 大勢の人の前に出るのは苦にならない
7. 動作は、きびきびしているほうではない
8. 意見が対立した場合は、なるべく妥協しようとするほうである
9. ひとりであるほうが、大勢というより気が楽である
10. なにかをするときは、いつもエネルギーが豊富である
11. ひとによって話し方や態度を変えるほうである
12. 動作は活発なほうである
13. 議論することが、好きなほうである
14. 知らない人に会うのは、気が重いほうである
15. 思ったつと、すぐ実行に移るほうである
16. 物事を理論的に考えるほうである
17. 会合のとき、ひとめにたたないところに席をとるほうである
18. ひとより先に物事を始めるほうである
19. なにかする前に、じっくり計画をたてるほうである
20. ひとにものを頼むのは、苦手なほうである
21. なんでも、よく考えてみないと、気がすまないほうである
22. 知らない人と話すときは、固くなってしまうほうである
23. 体を動かすことが好きなほうである
24. じっとがまんしていても、あまり苦にならない
25. 疲れやすいほうである
26. 思うように物事が進まないと、投げ出したくなるほうである
27. 引込思案なほうである
28. 物事を進めるときは、急がず、自分のペースを守るほうである
29. 徹底的にやらないと、気がすまないほうである
30. 失敗するのではないかと、心配するほうである
31. 少々待たされても、あまりイライラしないほうである
32. 知らない人とでも、すぐ友だちになれるほうである
33. なかなか決心がつかないほうである
34. ひと前では、あがりやすいほうである
35. いつも、なにかしていなければ気がすまないほうである
36. とかく物事を固く考えがちである
37. ひとから感情を傷つけられやすい
38. 世の中には不満なことが多い
39. いろいろなタイプの人と気軽につき合っているほうである
40. ひとの考え方を、気にしないほうである
41. ものごとを、あくまでも追求するほうである
42. なにかやり始めると、こつこつ粘り強くやるほうである
43. ひとに見られていると、仕事ができないほうである
44. 物事になかなか集中できないことがある
45. 実行する前に、考え直してることが多い
46. むずかしい問題を考えるのが好きなほうである
47. きちようめんなちである
48. 新しいことを始めるときは、気おくれするほうである
49. ひとから批評や忠告を受けると、不愉快になるほうである
50. いろいろなグループのメンバーになりたいと思うほうである
51. ちょっとしたことにも、慎重なちである
52. ルールには、あまりこだわらないほうである
53. 理屈っぽい人間だといわれたことがよくある
54. 困難なことは、先にのぼすほうである
55. 過去の失敗を、あれこれと考えるほうである
56. まわりの人に、あいそをつかすことがある
57. 世話好きなほうである
58. なかなか自信が持てないほうである
59. ひとにさからうことは、あまりないほうである
60. ものごとは納得がいくまでよく考えるほうである
61. テキパキと物事をかたづけけるほうである
62. なにかにつけて考え込むことが多いほうである
63. 不きげんになることが、ときどきある
64. ひとから個人的な悩みごとの相談を、よく持ちかけられるほうである
65. 用心深いほうである
66. 正しいと思っても、かどをたててまで自分の意見を主張しないほうである
67. 時間には、あまりこだわらないほうである
68. 小さいことを気に病むほうである
69. ひとから十分理解されないことが多い
70. 意見の違うひととでも、気軽につき合っているほうである
71. 物事をまじめに考えすぎるほうである
72. 緻密な考えを必要とする仕事が好きでなほうである
73. 身のまわりの物がきちんとしていないと気がすまないほうである
74. ちょっとしたことが仕事のじゃまになるほうである
75. ひとからの忠告は、受け入れるほうである
76. ひとと友だちになりたいときには、自分から近付いていくほうである
77. 優柔不断なほうである
78. 気が短いほうである
79. いろいろ物事を考えることが好きなほうである
80. 現実的にはむずかしいと思っても、筋を通してこうとするほうである
81. 失敗があっても、あまりこだわらないほうである
82. 世の中には、気にいらないことが多い
83. 初対面のひととでも、気楽に話ができるほうである
84. なにごとも納得がいくまでは、容易に行動に出られないほうである
85. 物事を深く考えるほうである
86. 規則的な生活は、あまり性格に合わないほうである
87. むずかしい仕事や問題に直面すると、ゆううつになってしまうほうである
88. ひとと意見が合わず、イライラすることがときどきある
89. 自分と性格の合わないひととでも、気軽につき合っているほうである
90. 深く考えずに決断することがあるほうである

に示す。(註1)

この90項目から構成された質問紙によって以下の処理を行った。

処理法 因子分析の解法は、主因子法を用い varimax 回転によって単純構造を求めた。

被験者 大学生男女2913名に実施し、その中から、文系、理系男子各500名分のデータを無作為抽出して使用した。データの収集は、昭和56年5月～6月にかけて行われた。(註2)

結果

回転後の因子と各項目の負荷量を表2に示す。抽出された因子は7因子であるが、各因子の負荷量をみると、第6因子から極端に低くなっており、その内容からみても第V因子までで説明するのが妥当と思われる。

各因子に高い寄与率を示した項目をまとめると以下のようになる。第1因子：外向性－内向性の次元を示す“向性”の因子，第2因子：感情の安定性を内容とする“情緒的安定性”の因子，第3因子：ものの考え方などを内容とする“思考的向性”の因子，第4因子：活動性の高さや作業などの速さを内容とする“活動性”の因子，第5因子：ものごとへの対処の方法を内容とする“慎重性”の因子。以上の5因子は、共通特性次元と考えられる。

次に、同じデータで3因子まで求め、それを varimax 回転して単純構造を求めた。これは、青木(1976)および若林(1982 a)が、全く異なる特性リストをもとにデータを収集し、それを因子分析した結果、Kretschmerの3気質類型に対応する因子を得ていることから、類型次元に相当する因子を求めるために行った処理である。回転後の因子と各項目の負荷量を表3に示す。

各因子に高い負荷量を示した項目をまとめると以下のようになる。第1因子は、5因子解での“向性”と“活動性”の因子の内容を中心として含んでいるが、全体としてとらえると Kretschmer の循環気質の特徴に相当すると考えられる。第2因子は、“情緒的安定性”の因子の大部分を含むが、全体としては分裂気質の特徴に相当すると考えられる。第3因子は、“思考的向性”と“慎重性”の因子と部分的に重なり合っているが、全体的にみると粘着気質の特徴に相当すると考えられる。以上2つの因子解の関係をわかりやすく図示すると図1のようになる。

考察

因子分析の結果、類型に相当するものは3因子、共通特性に相当するものは5因子によって説明できることが示唆された。このうち類型に相当する3因子の方は、その内容が Kretschmer の3気質類型にほぼ対応しているの、パーソナリティ類型の因子として妥当性があるといえるが、5因子の方は共通特性次元として妥当性があるだろうか。

そこで、ここで得られた5因子を他の類似の研究と比較してみると、Tupes & Christal (1961), Norman (1963), Passini & Norman (1966), 長島ら (1967), 中里ら (1976) などの性格特性次元の因子分析的研究で報告されている因子とほぼ対応している。したがって、この5因子を共通特性の因子と考えてよいであろう。

従来、同一の資料に関して2種類以上の解で説明可能な場合には、いずれかの解を選択することが行われてきた。ここでの場合でいえば、パーソナリティを3つの類型か5つの共通特性次元のいずれか一方で説明するということである。しかし、ここでの2つの解における因子負荷量の高い項目をみると、.4以上の負荷量をもつ項目は、3因子解では49項目、5因子解では45項目である。そして両方の解に共通している項目は37項目であり、前者のうち12項目、後者のうち8項目は、それぞれの因子解にのみ高い負荷量をもっている。こうした傾向は、.3以上の負荷量をもつ項目を加えると、さらに明瞭になってくる。以上のことを考慮するならば、2つの因子解は二者択一すべきではなく、両方から解釈し説明することが望ましいといえよう。

以上のことを整理すると、3因子解と5因子解から、より具体的にいえば3気質類型と5性格特性次元の両方からパーソナリティを把握することができるということである。したがって、各個人のパーソナリティは、まず気質類型で何型に含まれるかを判定し、次いで性格特性次元上にどのようなプロフィールを描くかということで記述されることになる。このような考え方によって、類型論と特性論とを相補的に統合したパーソナリティ理解が可能になったといえよう。

そこで、このようなパーソナリティ理解の方法を“3気質類型・5性格特性次元理論”と名付けるとともに、気質類型と性格特性次元の各名称を以下のとおりとする。

3 気質類型

- I. 循環性気質型
- II. 分裂性気質型
- III. 粘着性気質型

註1：この90項目を選択するプロセスは、本研究の主要な問題ではないので、詳細は省略した。

註2：データの収集については、(社) 日本経営協会の協力を得た。

表 2 因子負荷量表 (回転後) — 7 因子解—

E L M	I	II	III	IV	V	VI	VII
1	0.540	0.195	-0.059	0.215	-0.003	0.162	0.050
2	0.019	0.284	-0.074	-0.089	-0.050	0.108	0.115
3	0.486	0.118	0.077	0.190	-0.064	0.136	-0.009
4	0.156	0.098	0.032	0.487	0.048	0.023	-0.007
5	-0.137	-0.028	-0.279	-0.189	-0.029	0.101	0.148
6	0.635	0.106	0.111	0.101	-0.011	-0.046	-0.023
7	0.120	0.161	-0.082	0.666	0.144	0.056	0.004
8	-0.135	-0.008	-0.265	-0.203	0.102	0.237	-0.004
9	0.268	0.076	-0.113	0.242	-0.060	0.126	0.173
10	0.294	0.053	0.174	0.511	0.040	0.036	-0.022
11	-0.008	-0.258	-0.043	0.001	0.024	0.001	-0.027
12	0.157	0.063	-0.023	0.751	0.015	0.077	-0.003
13	0.291	-0.016	0.453	0.100	-0.102	0.057	0.033
14	0.651	0.165	0.040	0.033	-0.018	0.070	-0.010
15	0.291	0.037	0.098	0.349	0.082	-0.041	-0.036
16	0.039	0.047	0.560	-0.057	0.096	0.044	-0.016
17	0.493	0.097	0.115	0.184	-0.039	-0.086	0.045
18	0.351	0.092	0.194	0.359	0.151	-0.000	-0.050
19	0.004	0.092	0.280	0.010	0.459	0.071	-0.084
20	0.360	0.140	-0.015	0.130	0.014	-0.055	0.017
21	-0.063	-0.107	0.476	-0.075	0.281	0.055	-0.091
22	0.636	0.185	0.001	-0.005	-0.069	-0.046	0.006
23	0.141	0.021	-0.094	0.407	0.025	0.079	0.040
24	-0.080	0.269	0.196	-0.122	0.111	0.136	0.044
25	0.103	0.320	-0.021	0.271	0.037	-0.005	0.079
26	0.180	0.421	0.189	0.139	0.164	-0.066	0.075
27	0.665	0.146	0.032	0.191	-0.052	-0.082	0.038
28	-0.040	-0.247	-0.200	0.060	-0.193	-0.043	0.148
29	0.155	-0.021	0.364	0.193	0.273	0.005	-0.167
30	0.277	0.463	0.042	0.121	-0.095	-0.154	-0.039
31	0.002	0.354	0.104	-0.050	0.052	0.172	-0.003
32	0.629	0.026	0.026	0.069	-0.079	0.268	-0.027
33	0.388	0.379	0.056	0.269	0.023	-0.219	-0.034
34	0.621	0.171	0.035	0.042	0.014	-0.142	-0.030
35	0.193	-0.114	0.149	0.285	0.021	-0.016	-0.029
36	-0.143	-0.348	0.287	-0.141	0.210	0.000	0.105
37	0.078	0.461	-0.151	0.056	0.005	0.028	0.076
38	0.064	0.291	-0.009	-0.006	-0.001	0.009	0.681
39	0.478	0.168	0.052	0.210	-0.057	0.409	-0.026
40	0.074	-0.116	-0.094	-0.053	-0.116	0.049	-0.023
41	-0.030	-0.253	-0.044	-0.001	0.158	0.051	0.161
42	-0.031	0.204	0.243	0.090	0.342	0.060	-0.065
43	0.309	0.345	0.005	0.159	0.013	0.025	0.035
44	0.177	0.007	0.226	0.161	0.103	-0.028	-0.020
45	0.131	0.189	-0.135	0.230	-0.285	-0.107	0.039
46	0.081	0.072	0.554	0.050	-0.000	0.053	0.090
47	0.004	-0.080	0.023	0.056	0.573	0.020	-0.043
48	0.408	0.291	0.117	0.217	-0.090	-0.056	-0.036
49	0.060	0.398	0.113	0.008	0.055	0.164	0.200
50	0.185	-0.039	0.072	0.195	-0.016	0.216	0.010
51	0.134	0.244	-0.276	0.130	-0.454	-0.139	-0.014
52	-0.089	0.009	0.059	0.042	0.321	-0.033	0.285
53	0.018	-0.151	0.453	-0.070	-0.117	-0.092	0.057
54	0.154	0.277	0.194	0.182	0.254	-0.085	0.052
55	0.259	0.576	-0.019	0.098	-0.085	-0.116	-0.086
56	0.016	0.362	-0.093	-0.115	0.048	0.072	0.253
57	0.314	-0.061	0.123	0.247	0.121	0.147	0.116
58	0.386	0.361	0.088	0.293	0.015	-0.194	-0.005
59	-0.157	0.191	-0.201	-0.197	0.191	0.156	-0.004
60	0.034	0.032	0.511	0.101	0.302	0.073	-0.097
61	0.238	0.111	0.095	0.478	0.323	-0.007	-0.033
62	0.163	0.521	-0.240	0.196	-0.190	-0.028	0.029
63	0.100	0.428	0.005	0.037	0.040	0.080	0.139
64	0.332	0.065	0.132	0.192	0.069	0.176	0.022
65	0.135	0.261	-0.176	0.008	-0.365	-0.089	0.076
66	-0.160	-0.003	-0.294	-0.178	0.129	0.167	0.051
67	-0.010	-0.121	0.048	0.154	0.333	-0.080	0.126
68	0.221	0.649	-0.026	0.115	-0.177	-0.004	-0.128
69	0.267	0.343	-0.149	0.121	0.189	-0.015	0.177
70	0.219	0.247	0.167	0.156	-0.095	0.583	-0.010
71	0.136	0.361	-0.305	0.131	-0.303	0.029	0.090
72	0.041	0.080	0.507	0.029	0.159	-0.005	0.028
73	0.061	-0.139	0.022	0.176	0.455	-0.025	-0.020
74	0.165	0.507	-0.051	0.097	-0.088	0.055	0.063
75	0.050	0.180	-0.005	0.038	0.181	0.206	0.104
76	0.477	-0.008	0.041	0.163	-0.069	0.109	0.050
77	0.069	0.191	0.024	0.116	0.234	-0.101	-0.022
78	-0.056	0.354	-0.023	-0.167	0.091	0.172	0.024
79	0.070	-0.017	0.482	-0.040	0.105	0.127	0.047
80	0.075	0.059	0.388	0.136	0.143	0.021	-0.002
81	0.255	0.515	0.020	0.152	-0.179	0.012	-0.197
82	0.052	0.269	0.031	0.004	0.016	0.024	0.671
83	0.753	0.067	0.026	0.010	-0.048	0.222	-0.034
84	0.163	0.166	-0.274	0.212	-0.332	-0.048	0.094
85	-0.048	-0.202	0.497	-0.063	0.336	0.122	-0.055
86	-0.055	0.029	-0.028	0.097	0.365	-0.091	0.169
87	0.239	0.473	0.141	0.213	-0.008	-0.022	0.132
88	0.041	0.527	-0.081	-0.074	0.018	0.152	0.133
89	0.258	0.234	0.158	0.170	-0.105	0.629	0.017
90	0.054	-0.119	-0.243	0.070	-0.421	0.044	-0.069

表 3 因子負荷量表 (回転後) — 3 因子解—

E L M	I	II	III
1	0.557	0.208	-0.093
2	-0.029	0.311	-0.095
3	0.532	0.104	-0.033
4	0.391	0.080	0.043
5	-0.274	0.040	-0.193
6	0.602	0.078	-0.009
7	0.428	0.158	0.031
8	-0.265	0.047	-0.090
9	0.321	0.119	-0.133
10	0.543	0.025	0.130
11	-0.031	-0.247	0.002
12	0.520	0.042	-0.006
13	0.384	-0.039	0.239
14	0.575	0.154	-0.061
15	0.435	0.013	0.091
16	0.109	0.031	0.466
17	0.523	0.077	-0.008
18	0.509	0.069	0.201
19	0.042	0.113	0.506
20	0.363	0.128	-0.054
21	-0.016	-0.106	0.548
22	0.533	0.163	-0.134
23	0.307	0.031	-0.052
24	-0.081	0.290	0.220
25	0.230	0.320	-0.016
26	0.260	0.418	0.197
27	0.656	0.124	-0.100
28	-0.058	-0.216	-0.250
29	0.291	-0.055	0.428
30	0.334	0.397	-0.109
31	0.023	0.356	0.102
32	0.579	0.029	-0.079
33	0.485	0.318	-0.031
34	0.543	0.137	-0.062
35	0.329	-0.130	0.114
36	-0.185	-0.287	0.389
37	0.087	0.467	-0.140
38	-0.002	0.456	-0.007
39	0.547	0.175	-0.021
40	0.022	-0.119	-0.143
41	-0.077	-0.172	0.104
42	0.063	0.209	0.399
43	0.356	0.334	-0.039
44	0.265	-0.006	0.212
45	0.228	0.143	-0.320
46	0.198	0.068	0.399
47	-0.011	-0.021	0.404
48	0.497	0.236	-0.043
49	0.084	0.447	0.110
50	0.274	-0.026	0.050
51	0.172	0.168	-0.546
52	-0.096	0.113	0.275
53	0.056	-0.170	0.251
54	0.246	0.282	0.271
55	0.308	0.500	-0.151
56	-0.067	0.432	-0.047
57	0.390	-0.014	0.163
58	0.499	0.309	-0.008
59	-0.266	0.236	-0.003
60	0.169	0.020	0.572
61	0.445	0.112	0.257
62	0.234	0.482	-0.352
63	0.116	0.454	0.004
64	0.401	0.079	0.123
65	0.116	0.224	-0.409
66	-0.289	0.064	-0.095
67	0.029	-0.059	0.265
68	0.305	0.559	-0.208
69	0.241	0.395	-0.028
70	0.344	0.264	0.079
71	0.180	0.296	-0.461
72	0.136	0.077	0.466
73	0.099	-0.093	0.322
74	0.212	0.492	-0.138
75	0.055	0.239	0.125
76	0.488	-0.001	-0.053
77	0.112	0.188	0.144
78	-0.116	0.378	0.041
79	0.121	-0.001	0.427
80	0.200	0.051	0.370
81	0.361	0.411	-0.171
82	0.000	0.434	0.038
83	0.648	0.067	0.082
84	0.217	0.143	-0.446
85	-0.006	-0.176	0.613
86	-0.050	0.104	0.226
87	0.351	0.466	0.046
88	0.006	0.559	-0.068
89	0.381	0.262	0.067
90	0.070	-0.168	-0.452

(表註) 表2,3とも項目番号は表1と対応している。

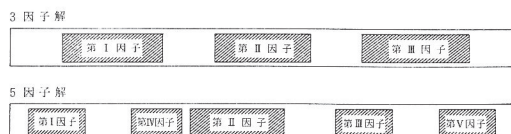


図 1 3 因子解と 5 因子解の因子負荷量の高い項目の対応関係

5 性格特性次元

- I. 向性
- II. 情緒的安定性
- III. 論理性
- IV. 活動性
- V. 慎重性

以上の理論的枠組をもとに、次の研究Ⅱにおいて、具体的に質問紙法検査を作成し、その標準化を行う。

研究Ⅱ

目的

研究Ⅰで導かれた“3 気質類型—5 性格特性次元モデル”を整理し、この理論を背景とした質問紙法性格検査を作成し、標準化を行う。

方法

研究Ⅰの結果をもとに、3 気質類型、5 性格特性次元それぞれを尺度とし、各尺度を構成する質問項目を決定する。この項目選定については、因子分析での結果を優先し、それにもとづいて尺度を構成した上で標準化を行ったことがある(若林; 1982 b)。(註3) 本研究では、この1982年版をもとに部分的に改訂を加え、理論上ならびに実用上の改善を試みた上で再度標準化を行うものである。

今回改訂された部分は以下の点である。

- 1) 3 気質類型、5 性格特性次元それぞれの尺度の項目数ある程度そろえる。これは、1982年版が因子分析での結果のみによって作成されたために、3 気質類型、5 性格特性次元のいずれも尺度によって項目数の差がかなりみられたことに対する修正である(尺度間の項目数の差は、大きいものでは、3 気質類型では 8 項目、5 性格特性次元では 7 項目に達していた)。
- 2) 各尺度内容を、より測定目標に妥当なものとする。これも、1982年版では因子分析の結果作成されたた

註 3 : 1982年版の標準化における各尺度の項目数は、循環性気質; 26項目、分裂性気質; 22項目、粘着性気質; 18項目、向性; 15項目、情緒的安定性; 15項目、論理性; 8項目、活動性; 8項目、慎重性; 10項目である。

め、一部尺度の内容に偏りがあるので、尺度名に対応した項目を付加する。

具体的には、以下の手順で改訂、修正を行った。

①項目の収集: 各尺度の測定内容の一部を構成すると思われる質問項目を収集した。特に 3 気質類型の尺度では、Kretschmer を始めとする精神病理学的、臨床心理学的記述をも加えた。

②1982年版と収集された項目(58項目)を同一の用紙に印刷し、この質問紙を大学生男子426名、女子237名に実施し回答を求めた。このデータをもとに、1982年版の各尺度と新たに収集された58項目との点双列相関係数を算出した。

③各尺度別に点双列相関係数が0.7以上の項目をピックアップし、それぞれの尺度を構成する項目として加えた上で、各尺度別に項目間相関を算出した。そして項目間相関がきわめて高い(0.9以上の)項目対がある場合には、その内容を検討した上で取捨選択を行った。すなわち、項目内容がほぼ等しく、かつ項目間相関が高い項目対については、いずれか一方の項目を削除した。

④以上の手続きによって残された各項目について G-P 分析を行い、その結果をもとに各尺度の項目数ある程度そろえた。

以上の手続をふまえて、今回再標準化のために使用された項目は表4のとおりである。

なお、参考までに1982年版の3 気質類型尺度の項目と5 性格特性次元の項目の因子分析結果を表5に掲げておく。

表4の90項目と虚偽尺度の8項目および buffer 項目の2項目から構成された全100項目からなる質問紙を作成し、実施して回答を収集した。

被験者は、大学生男子2216名、女子1093名(7大学、13学部、42学科、女子は短大生を含む)。大学の所在地は、東京、埼玉、千葉、福島、大阪、福岡。なお、各質問項目への回答は3件法で求めた。(註4)

結果

1) 尺度別平均得点と標準偏差

結果を表6に示す。得点は、各項目のキイ側に回答した場合は2点、どちらともいえない場合は1点、キイ側でない場合は0点である。また、各尺度別得点分布も、各尺度ともほぼ正規分布を示していた。ここでは一例として男性の循環性気質の尺度の得点分布を図2に示す。

2) 3 気質類型尺度にもとづく類型の判定

註 4 : ここでのデータの収集についても、(社)日本経営協会の協力を得ている。

表 4 標準化に使用された質問項目

No.	気質 類型	性格 特性	質問項目	No.	気質 類型	性格 特性	質問項目
1	循		そそっかしいところがあり、 ときどき失敗することがある。	33	分		まわりの人に、いやげがさす ことがある
2	循		いつも陽気だが、ちょっとし たことで落ち込んでしまう	34	分		なにげなく、人の痛いところ を突いたりすることがある
3	循		友人から悩みごとの相談をも ちかけられることがよくある	35	分		友人に、十分理解してもらえ ないことが多い
4	循		考え方の違う人とでも、気軽 につき合うことができる	36	分		疲れやすいほうである
5	循		気の毒な話を聞くと、すぐに 同情してしまう	37	分		なかなか決心がつかないこと がある
6	循		気軽に冗談を言ったり、ユー モアを発揮したりする	38	分		人と付き合うのがわずらわし いと思うことが多い
7	循		いろいろなことに興味をもち、 それにかかわりたがるほうであ る	39	分		皆が突っ張っていても、自分には おもしろくないので笑えないこ とがある
8	循		調子の良いときと悪いときの 波がある	40	分		人間よりも自然や動物に親し みを感じるほうである
9	循	向	交際が下手なほうである*	41	分		他人の悩みごとなどには、比 較的無感心なほうである
10	循	向	ひとにものをたのむのは苦手 なほうである*	42	分		ときどき空想にふけることが ある
11	循	向	知らない人とでも、すぐ友だ ちになることができる	43	分		周囲の人と打ちとけないこと が多い
12	循	向	世話好きである	44	分	情	小さなことが気になるほうで ある**
13	循	向	引込思案なほうである*	45	分	情	失敗しても、あまりこだわら ないほうである***
14	循	向	ひとまえでは、あがりやすい ほうである*	46	分	情	思うようにものごとが進まな いと投げ出したくなる**
15	循	向	会合などでは、あまり目立た ない場所に席をとることが多い*	47	分	情	不機嫌になることがときどき ある**
16	循	活	動作は活発なほうである	48	分	情	少しぐらい待たされても、あ まりイライラしない***
17	循	活	いつもエネルギーに行動 している	49	分	情	ちょっとしたことが、仕事や 勉強のじゃまになる**
18	循	活	他の人より先に、何かを始め ることが多い	50	分	情	他の人から批評や忠告を受け ると、不愉快になる**
19	循	活	考えたことは、すぐ実行に移 すほうである。	51	分	情	失敗したとき、自分に責任が あると思ひ込みやすい*
20	循	活	体を動かすことが好きだ	52	分	情	ちょっとしたことで、カッと することがある*
21	循	活	他の人より仕事は速くこなす ほうである	53	分	情	どちらかといえば楽観的なほ うである
22	循	活	立居振舞は、あまりきびきび しているほうではない*	54	分	情	感情面のムラは、ほとんどな いほうである
23	循	向	対人面では積極的なほうである	55	分	情	ひとに見られていると、仕事 ができないほうである*
24	循	向	自分の考えは、ためらわずに 主張するほうである	56	粘		ものごとを固く考えがちなほ うである
25	循	向	話し合いなどでは、受け身に なることが多い*	57	粘		がまん強いほうだが、ときど き爆発することがある
26	循	向	皆で集まって、にぎやかにや るのが好きである	58	粘		話し方がゆっくりしているほ うである
27	循	向	他人との交渉は、得意なほう である	59	粘		実行する前に、考え直してみ ることが多い
28	循	活	ものごとはテキパキと処理す るほうである	60	粘		徹底的にやらないと気がすま ないほうである
29	循	活	考えるよりも、まず行動する ほうである	61	粘		ものごとをまじめに考えすぎ るところがある
30	循	活	期限が決められている仕事は 苦手である*	62	粘		何かに夢中になると、他のこ
31	分		世の中には不満なことが多い と思う				
32	分		プライドを傷つけられると、 とても腹が立つ				

(表 4 つづき)

No.	気質 類型	性格 特性	質問項目
63	粘		とに注意が回らないことがある ものごとを手際よく処理する ことが、うまいほうである*
64	粘		規則などをきちんと守らない と気がすまないほうである
65	粘		自分の考えにこだわるほうで ある
66	粘		他人の気持ちや感情の機微に 敏感である*
67	粘	論	くどいくらい相手に念を押す ほうである
68	粘		他の人と意見が対立しても、 なかなか譲らないほうである
69	粘	論	何でもよく考えてみないと、 気がすまないほうである
70	粘	論	ものごとは、とことんまで考 えないと落ちつかないほうであ る
71	粘	慎	ちょっとしたことにも慎重な ほうである
72	粘	慎	何かやり始めると、こつこつ 粘り強くやるほうである
73	粘	慎	きちょうめんなほうである
74	粘	慎	何ごとも納得するまでは行動 できないほうである
75	粘	慎	堅実で、1つ1つのことを順 番に処理していくほうである
76		論	議論をしたりするのが好きで ある
77		論	友人に理屈っぽい人間だとい われることがある
78		論	ものごとを理論的に考えるほ うである
79		論	むずかしい問題を考えるのが 好きである
80		論	緻密な考えを必要とする仕事 が好きである
81		論	理論よりも経験を重視するほ うである*
82		論	いろいろなものごとを考えてみ ることが多い

No.	気質 類型	性格 特性	質問項目
83		論	抽象的、客観的な思考をする のが得意である
84		慎	規則的な生活は、あまり好き ではない*
85		慎	身のまわりのものがきちんと していないと気がすまない
86		慎	時間にはあまりこだわらない*
87		慎	状況に応じて柔軟な対応がで きるほうである*
88		慎	ものごとの原則を重視し、融 通はきかないほうである
89		慎	一つのことを着実に持続して 進めることができる
90		慎	常に細心の注意を払い、慎重 なほうである
91		嘘	友人の中に嫌いな人はいない
92		嘘	腹が立つことがあっても、顔 に出したことはない
93		嘘	今まで嘘をついたことはない
94		嘘	他人のことを悪く思ったこと はない
95		嘘	お世辞をいったことはない
96		嘘	いつも冷静で、決してあわて ることはない
97		嘘	勝負ごとなどには負けたくな い*
98		嘘	その日のうちにすべきことを、 次の日にのばすようなことはない
99		緩	芸術では、絵画より音楽の方 が好きだ
100		緩	勉強や仕事よりも、趣味のほ うに生きがいを感じる

表註) 循=循環性気質, 分=分裂性気質, 粘=粘性気質, 向=向性, 情=情緒的安定性, 論=論理性, 活=活動性, 慎=慎重性, 嘘=嘘構尺度, 緩=緩衝項目
*逆転項目, **分裂性気質の項目としては“はい”が
キイ, 情緒的安定性の項目としては逆転項目, ***
分裂性気質の項目としては逆転項目, 情緒的安定性の
項目としては“はい”でキイ

本検査では、気質類型を判定することが、結果の表示において重要になってくる。判定の方法は、3気質類型尺度それぞれの標準得点を基準として、標準得点が60点以上であれば、その尺度の類型の典型、55～59点であれば準型とみなすのである。したがって、ここで出現する類型は“循環性気質型”“分裂性気質型”“粘性性気質型”の単独型に加えて、“循環・分裂性気質混合型”“循環・粘性性気質混合型”“分裂・粘性性気質混合型”“三気質混合型”の各混合型、および“不定型”の8種類であり、このうち“不定型”を除く7種類には典型と準型があるので、実際には15種類が存在することになる。これをわかりやすく図示すると図3のようにな

る。

以上の分類基準にもとづいて3309名のデータを分類判定した結果は、表7に示したとおりであった。

考 察

研究Ⅰから導かれた“3気質類型—5性格特性次元”理論をもとに質問紙法性格検査を作成し標準化した結果、従来の類型論と特性論を統合した形でのパーソナリティ記述が可能になったと考えられる。ここで問題となるのは、類型の判定についてであろう。本来、類型とは質的に異なるものを前提としており、尺度による表示とはなじまないと考えられているからである。しかし、この点については、Tellenbach (1961) の次のことばが参考

表 5-1 1982年版 3 気質類型尺度の因子分析
結果 (回転後)

	I	II	III
1	.557	-.208	-.093
2	.391	.080	.043
3	.532	.104	-.033
4	.602	.078	-.009
5	.428	-.156	.031
6	.321	.119	-.133
7	.575	-.154	-.061
8	.523	.077	-.008
9	.543	.025	.130
10	.401	-.079	.123
11	.363	-.128	-.054
12	.344	-.264	.079
13	.533	-.163	-.134
14	.520	.042	-.006
15	.656	.124	-.100
16	.579	.029	-.079
17	.543	-.127	-.062
18	.381	-.262	.067
19	.547	-.175	-.021
20	.497	-.236	-.043
21	.435	.013	.091
22	.390	-.014	.163
23	.509	-.069	.201
24	.488	-.001	-.053
25	.307	.031	-.052
26	.648	.067	-.082
27	.260	-.418	.197
28	.334	-.397	-.109
29	.023	-.356	.102
30	-.029	-.311	-.095
31	.256	-.434	-.039
32	.087	-.467	-.140
33	.230	-.320	-.016
34	.084	-.447	.110
35	.318	-.485	-.031
36	.308	-.500	-.151
37	.234	-.482	-.352
38	.116	-.454	.004
39	.305	-.559	-.203
40	-.002	-.456	-.007
41	.212	-.492	-.138
42	.361	-.411	-.171
43	-.067	-.432	-.047
44	.116	-.378	.041
45	.351	-.466	.046
46	.000	-.434	.038
47	.006	-.559	-.068
48	.241	-.395	-.028
49	.042	-.113	.506
50	.063	-.209	.399
51	-.185	.287	.389
52	.022	.193	.396
53	-.016	-.106	.548
54	-.011	.021	.404
55	.228	-.143	.320
56	.018	.003	.360
57	.180	-.296	.461
58	.172	-.168	.546
59	.200	-.051	.370
60	.169	-.020	.572
61	.291	-.055	.428
62	.116	-.224	.409
63	.217	-.142	.446
64	.070	-.168	.452
65	-.039	.175	.592
66	-.112	.134	.373

表 5-2 1982年版 5 性格特性次元尺度の因子
分析結果 (回転後)

	I	II	III	IV	V
1	.540	.195	-.059	.210	.003
2	.486	.118	.077	.190	-.064
3	.635	.106	.111	.101	.011
4	.651	.165	.040	.033	-.018
5	.493	.097	.115	.184	.039
6	.360	.140	-.015	.130	.014
7	.636	.185	.001	-.005	-.069
8	.665	.164	.032	.191	-.052
9	.629	.026	.028	.069	.079
10	.621	.171	.035	.042	.014
11	.478	.168	.052	-.210	.057
12	.408	.291	.117	.217	-.090
13	.314	.061	-.123	.247	-.121
14	.477	.008	.041	.163	.069
15	.753	.067	.026	.010	-.048
16	.180	.421	.189	.139	.164
17	.277	.463	.042	.121	-.095
18	.002	.354	.104	-.050	.052
19	.309	.454	.005	.159	.013
20	.078	.461	-.151	.056	.005
21	.060	.398	.113	.008	.055
22	.249	.576	-.019	.098	-.085
23	.163	.521	-.240	.196	-.190
24	.100	.428	.005	.037	.040
25	.221	.649	-.026	.115	-.177
26	.165	.507	-.051	.097	-.088
27	.255	.515	.020	.152	-.179
28	-.056	.454	-.023	-.167	.091
29	.239	.473	.141	.213	-.008
30	.041	.527	-.081	-.074	.018
31	.291	-.016	-.453	.101	-.102
32	.039	.047	-.500	-.057	.096
33	-.063	-.107	-.476	-.075	.281
34	.081	.072	-.554	.050	.000
35	.018	-.151	-.453	-.070	-.117
36	.034	.032	-.511	.101	.302
37	.041	.080	-.507	.029	.159
38	.070	-.017	-.482	-.040	.105
39	.156	.098	.032	.487	.048
40	.120	.161	-.082	.666	.144
41	.294	.053	.174	.511	.040
42	.157	.063	-.023	.751	.015
43	.291	.037	.098	.349	.082
44	.351	.092	.194	.559	.141
45	.151	.021	-.094	.497	.025
46	.238	.111	.095	.478	.323
47	.004	.093	.280	.010	-.459
48	-.031	.204	.243	.090	-.342
49	.004	-.080	.023	.056	-.573
50	-.011	-.121	.048	.154	-.333
51	.134	.244	-.276	.130	-.454
52	.135	.261	-.176	.008	-.365
53	.061	-.139	.022	.176	-.455
54	.163	.166	-.274	.212	-.332
55	-.055	.029	-.028	.097	-.365
56	.054	-.119	-.243	.070	-.421

表 6 尺度別平均得点と標準偏差

尺 度 名	男 性		女 性	
	$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD
循環性気質	23.4	9.98	22.9	10.35
分裂性気質	19.2	9.30	20.5	9.82
粘着性気質	17.6	7.72	18.1	7.28
向 性	12.8	6.31	12.4	6.54
情緒的安定性	12.7	6.12	11.9	6.26
論 理 性	10.6	5.43	10.2	5.11
活 動 性	11.8	5.25	11.0	5.30
慎 重 性	13.1	5.44	13.6	5.36

トクテン	%	0.....5.....10。
0-1	0.6	★
2-3	1.5	★★
4-5	1.9	★★
6-7	2.6	★★★
8-9	3.6	★★★★
10-11	4.3	★★★★★
12-13	6.8	★★★★★★
14-15	6.8	★★★★★★
16-17	5.9	★★★★★★
18-19	6.9	★★★★★★
20-21	6.7	★★★★★★
22-23	7.8	★★★★★★
24-25	6.0	★★★★★★
26-27	7.9	★★★★★★
28-29	6.5	★★★★★★
30-31	5.4	★★★★★★
32-33	4.9	★★★★★
34-35	3.5	★★★★
36-37	4.1	★★★★
38-39	2.1	★★★
40-41	2.0	★★★
42-43	1.1	★★
44-45	0.3	★

図 2 循環性気質尺度の得点分布 (男子)

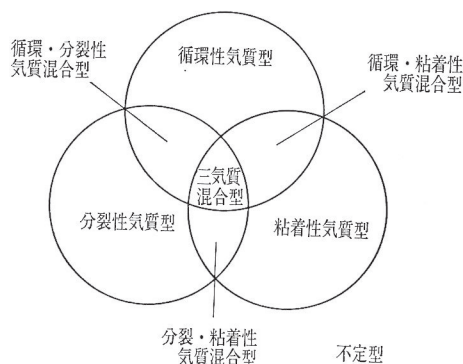


図 3 3 気質類型の相互関係

になるだろう。彼は類型について“1つの類型において概念的に重要なことは、その類型が確固たる中心を有することであって、画然たる境界が存することではない。

表 7 気質類型別出現率(%)

気 質 類 型	男 性	女 性
循 環 性	24.3	23.8
分 裂 性	18.6	17.9
粘 着 性	22.8	23.9
循環・分裂性混合	2.2	2.3
循環・粘着性混合	4.2	4.6
分裂・粘着性混合	7.6	7.0
三 気 質 混 合	0.4	0.3
不 定 型	19.9	20.2

我々は常に類型をただその核心において決定することはできるが、その境界を定めることはできない”と述べている。本研究では、このような考え方にもとづき、各気質類型の特徴という中心に、どの程度近いかを標準得点で表わすことができると考えるのである。

また、本研究での類型分類は、これまで類型論に対して言われてきた批判に対する1つの回答を示唆している。すなわち、Arnold (1969) は、類型論に対する批判の1つとして、“中間型や移行型が無視され、ある個人を類型に入れるとき、類型固有の面のみが注目され、他の面が見失われる”ことを挙げているが、本研究では“混合型”という形で、中間型あるいは移行型というものを考慮しており、また同時に性格特性次元上へのプロフィールも得られるので、ある個人を1つの類型に入れても、それによって他の面が見失われることはないのである。つまりここでは、同じ類型に入る人でも異った特徴をもつことがあるという現実的事態に対応するだけの柔軟性が保証されているのである。

さて、以上のように“混合型”を設定したにもかかわらず、各類型への分布状態をみると、実際に4種類の混合型に分類される人の割合は合計しても全体の14.4%にすぎない。これに対して、単独の気質類型に分類された人は、典型、準型を合わせると65.7%と、全体の約3分の2にも達している。これらのことは、本検査での気質類型の分類が実用性を持ち、かなり妥当性が高いことを示しているといえるだろう。

また、各混合型の中では“分裂・粘着性気質混合型”の割合が他の混合型と比べて大きくなっているが、このような傾向は、3気質類型の中で、分裂気質と粘着気質は何らかの類縁関係があるとする Kretschmer や佐野ら (1960) の臨床的、精神医学的記述と一致するものである。

なお、本検査の名称は“3気質類型・5性格特性次元検査”であるが、通称として5特性の頭文字をとって

“VERAC-性格検査”と呼ぶことにする。(註5)

研究 III

目 的

研究IIで標準化された VERAC—性格検査の信頼性、妥当性を検討する。

方 法

1. 信頼性の検討

再検査法による。具体的には、VERAC—性格検査(以下 VPI と略す)を同一の被験者群に4か月程度の間隔をおいて2度実施し、各尺度の得点の両検査間での相関を求める。

被験者：大学生男子216名、女子173名(2回の検査の両方に回答があった者)

実施年月日：昭和60年5月および9月

2. 妥当性の検討

併存的妥当性による。具体的には、VPI の各尺度が測定しようとしているものと類似した尺度をもつ質問紙法性格検査を同時に実施し、各尺度間の相関を求める。VPI の3気質類型の尺度に対しては、佐野らの“精研式パースナリティインベントリイ (INV)”を使用し、また5性格特性次元の尺度に対しては、“Y-G”“MPI”を使用した。

被験者：大学生男子239名、女子204名。

実施年月日：昭和60年6月～11月。

結 果

1. 信頼性について

再検査法による VPI の各尺度の信頼性係数を表8に示す。そこに示された数値からわかるように、男女ともすべての尺度において信頼性係数が0.8を上回っており、信頼性が高いことがわかる。

2. 妥当性について

1) 3気質類型の尺度の妥当性

VPI の3気質類型の尺度と“精研式パースナリティインベントリイ (INV)”の尺度の各々対応するものの相関を求めた(表9)。各尺度間の相関は、いずれも0.7～0.8となっており、妥当性(併存的妥当性)があるものといえよう。

2) 5性格特性次元の尺度の妥当性

まず、VPI の“向性”“情緒的安定性”の尺度とMPI の“E”“N” 両尺度との相関を求めた。その結果は表10のとおりである。この結果から、VPI の向性と MPI

表 8 再検査法による VPI の各尺度の信頼性係数

尺 度 名	男 性	女 性
循環性気質	.854	.839
分裂性気質	.893	.886
粘着性気質	.861	.855
向 性	.803	.820
情緒的安定性	.811	.806
論 理 性	.836	.815
活 動 性	.820	.833
慎 重 性	.861	.851

表 9 VPI の3気質類型の尺度得点と INV の3気質類型の尺度得点の相関係数

尺 度	男性	女性
VPIの循環性気質—INVの循環性気質	.731	.759
VPIの分裂性気質—INVの分裂性気質	.820	.798
VPIの粘着性気質—INVの癲癇性気質	.856	.845

表10 VPI と MPI の尺度間相関(一部)

尺 度	男性	女性
VPI の向性 — MPI のE	.720	.733
VPI の情緒的安定性 — MPI のN	.667	.644

の E、VPI の情緒的安定性と MPI の N がそれぞれかなり相関が高いことがわかる。したがって、VPI の2つの尺度についての併存的妥当性が確認されたといえる。

次に、VPI の5つの性格特性次元の尺度と Y-G 性格検査の12尺度との相関を求めた。その結果は表11のとおりである。尺度別にみていくと、VPI の向性と相関が比較的高かった尺度は、“社会的外向 (S)”，情緒的安定性と相関が高かった尺度は“抑うつ性 (D)” (マイナス)，“のんきさ (R)” など、論理性と相関が高かった尺度は“思考的外向 (T)” (マイナス)，活動性と相関が高かった尺度は“一般的活動性 (G)” などとなっている。VPI の慎重性は、Y-G の12尺度とはあまり高い相関は示していないが、その中では“のんきさ”と負の相関が若干認められる。以上の結果を全体的にまとめてみるならば、VPI の5つの性格特性次元の各尺度も、気質類型の尺度と同じように妥当性があるといえよう。

考 察

信頼性の検討は再検査法によって行ったが、いずれの尺度とも0.8以上の信頼性係数を示しており、信頼性は保証されたといえよう。中でも、3気質類型の尺度の方

註5：向性 (Extro-Introversion)，情緒的安定性 (Emotional Stability)，論理性 (Rationality)，活動性 (Activity)，慎重性 (Cautiousness)

表11 VPI の性格特性次元尺度と Y-G 性格検査12尺度の尺度間相関

	向 性	情緒的安定性	論 理 性	活 動 性	慎 重 性
D : 抑うつ性	-.361 -.333	-.557 -.524	.203 .224	-.325 -.307	.184 .162
C : 回帰性傾向	.274 .251	-.160 -.201	-.096 -.065	.187 .236	-.211 -.175
I : 劣等感	-.223 -.260	-.301 -.376	.115 .148	-.142 -.109	.035 .076
N : 神経質	-.154 -.211	-.464 -.493	.183 .211	-.106 -.090	.050 .121
O : 客観性がないこと	-.130 -.117	-.178 -.195	-.261 -.240	.100 .009	-.162 -.074
Co : 協調性がないこと	-.344 -.315	-.193 -.212	.170 .133	-.177 -.234	-.022 .104
Ag : 愛想の悪いこと	.062 .171	-.324 -.388	-.241 -.184	.118 .044	-.349 -.421
G : 一般的活動性	.484 .504	.238 .281	-.163 -.255	.754 .775	-.181 -.226
R : のんきさ	.314 .343	.533 .515	-.289 -.386	.305 .221	-.435 -.464
T : 思考的外向	.199 .276	.281 .305	-.708 -.696	.184 .247	-.317 -.376
A : 支配性	.275 .305	.249 .261	-.143 -.216	.331 .273	.140 .060
S : 社会的外向	.752 .763	.361 .404	-.304 -.366	.417 .456	-.067 -.191

表中の数値は、上段が男性、下段が女性

が性格特性次元の尺度より若干信頼性係数が高い傾向があるが、これはパーソナリティの理論からみても妥当な結果といえる。つまり、パーソナリティにおいては、類型は特性よりも基本的なものであり、状況や時間などによって変化しにくいものとして位置づけられているからである。したがって、4か月という間隔を置いて2度実施された検査の結果を比較した場合、類型を測定する尺度は特性を測定する尺度に比べて変動が小さくなくてはならないのである。ここで得られた結果は、このような傾向を若干ではあるが裏付けているといえよう。

一方、各尺度の妥当性の方は、一般に認知され評価が定まっている3種類の検査の尺度との併存的妥当性という形で確認された。

3気質類型の尺度は、それぞれ“精研式パーソナリテ

ィインベントリィ”の対応する尺度と比較されたが、ここでは測定しようとする目的がほぼ共通しているため、かなり高い尺度間相関が得られている。しかし、測定目的が共通しており、尺度名も同じであっても、VPIが因子分析をもとにした統計的技法によって作成された検査であるのに対し、精研式 INV は臨床的、経験的に作成された検査であることを考慮すると、この相関係数の持つ意味は大きいといえるのではないだろうか。つまり、Kretschmer の3気質類型論自体の妥当性をも示していると考えられるのである。なお、ここでは循環性気質の尺度間の相関係数が、他の2つのタイプの尺度間のそれに比べて若干低くなっているが、これは VPI の側の循環性気質の尺度を構成する項目内容に原因があると思われる。つまり、VPI の循環性気質の尺度を構成する項目に

は、抑うつ的な傾向を示す内容がほとんど含まれていないのである。それに対して INV の循環性気質の尺度を構成する項目には、躁的（高揚性の）内容をもつ項目とともに鬱的（抑鬱的）内容をもつ項目が含まれており、この点が相関係数に反映されたのであろう。しかし、臨床的、精神病理学的な類型概念としては INV の尺度の方が忠実であるものの、質問紙法検査のもつ限界を考慮すれば、VPI の循環性気質の尺度も妥当性があるとみなしてよいであろう。循環性気質にみられる躁と鬱の両面性は、継時的に変化するものであり、ある時点においてとらえる限りでは、その一方だけしか表面に表れてこないことが多いからである。このような問題は、特に類型論をもとにした質問紙法検査を作成する場合、常に障害となってきた。それ故、類型論の数量的研究もほとんど行われてこなかったのである。この点については、本研究の VPI も解決できていない課題であるが、最近若林（1985）は“3 気質類型・複合構造モデル”によって、このような問題の解決への可能性を示唆している。

また、性格特性次元の尺度については、MPI や Y-G の各尺度との相関係数から、それぞれ妥当性があることがわかるが、その一方で特定の尺度と同じものを測定しているといえるほど相関が高いわけではない。これは、ここでの 5 尺度が、MPI や Y-G とは異なる理論から構成されていることを意味しているといえよう。そしてこの 5 尺度は、前述したように、様々な研究が様々な方法やデータを用いて抽出したものと共通していることから、パーソナリティの基本次元として妥当なものといえるだろう。

全体的考察

本研究の目的は、パーソナリティの類型論と特性論を統合した質問紙法検査を作成することであった。類型論と特性論の統合の可能性については、すでに Eysenck などによって示唆されていた。しかし、そこで示唆されている統合は主として類型は特性の上位概念としての意味をもっており、そして特性プロフィールのパターンによって類型が判定されることになっていた。いわば“bottom-up”のパーソナリティ理論であった。したがって、そこでは類型と特性との関係が、いくつかの特性をまとめたものが 1 つの類型であるということであり、それ以上の意味をもっていなかったのである。すなわち、類型という質的相違をもつ概念と特性という量的相違をもつ概念との本質的な違いが反映されていなかったのである。本研究で作成され、標準化された VPI は、このような考え方に対して、人間のパーソナリティを把

握する場合には、まず類型を判定し、その上で特性プロフィールをみていくというアプローチを提唱している。ここでは、同一の類型に分類された個人間でも異なる特性プロフィールを示す場合があるし、別の類型に分類されても同じ特性プロフィールを示す場合もあると考えるのである。ここで特に強調したいのは、特性プロフィール上で類似した傾向を示しながら、別の類型に判定される場合である。このような場合、例えば外向性が 7 点とすると、従来では外向性に関しては同じ傾向をもつという意味しかもたなかったのであるが、VPI では“循環性気質型”の人の外向性 7 点と“分裂性気質型”の人の外向性 7 点は、外向性という特性上において量的な傾向としては等しいが、質的には異なると考えるのである。したがって、ここでは類型が優先的な位置づけをもっており、いわば“top-down”のパーソナリティ理論といえよう。こうした特性のような“部分”に類型という“全体性”が反映されている——すなわち部分に全体が含まれているようなモデルは、Mandelbrot によって“フラクタル (Fractal) 性”として数学的に理論化されているが、パーソナリティもこのような性質をもっていると考えられよう。彼のいうフラクタル性とは、いわゆる自己相似的入れ子構造という性質であり、どのような微小部分をとっても全体の構造がその中に縮小されて含まれているというモデルである。VPI では、パーソナリティにおいても、個人のもつ特性傾向は、その個人の気質類型を反映しているというフラクタル性をもつと考えるのである。このようにパーソナリティのフラクタル性という概念を導入することによって、類型論と特性論との真の意味での統合が可能になったといえるのではないだろうか。今後は、VPI における類型と特性との間にどのような相関関係があるのかといったことを含めて、さらにデータの収集、分析を行うとともに、各類型に分類された被験者群についての臨床的な妥当性の検討などといった課題が残されている。

文 献

- 1) 青木孝悦：1976，多数の性格領域から得られた性格構造，心理学研究，47，239-249.
- 2) Arnold, W.: 1969, *Person, Charakter, Persönlichkeit*, Verlag für Psychologie, Göttingen.
- 3) Eysenck, H. J.: 1953, *The structure of human personality*, Methuen, London.
- 4) Eysenck, H. J.: 1964, *Crime and personality*, Houghton Mifflin Co., Massachusetts.
- 5) 肥田野直：1967，性格の特性，性格心理学講座 1，性格の理論，金子書房.

- 6) Kretschmer, E. : 1921/1955, *Körperbau und Charakter*, Springer, Berlin.
- 7) Mandelbrot, B. B. : 1977, *Fractals : Form, Chance and Dimension*, Freeman, San Francisco.
- 8) 長嶋貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斉藤耕二・堀 洋道 : 1967, 自我と適応との関係についての研究 (2)——Self-Differential の作成——東京教育大学教育学部紀要, **13**, 59-83.
- 9) 中里活明・Michael, H. Bond・白石大介 : 1976, 人格認知の次元性に関する研究, 心理学研究, **47**, 139-148.
- 10) Norman, W. T. : 1963, Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of abnormal and social psychology*, **66**, 574-583.
- 11) Passini, F. T. & Norman, W. T. : 1966, Universal conception of personality structure, *Journal of personality and social psychology*, **4**, 44-49.
- 12) 佐野勝男・横田 仁・坂部先平 : 1960, パーソナリティインベントリの手引, 金子書房.
- 13) Tellenbach, H. : 1961, *Melancholie*, Springer, Berlin.
- 14) Tupes, E. C. & Christal, R. E. : 1961, Recurrent personality factors based on trait ratings. USAF ASD Technical Report. 61-67.
- 15) 若林明雄 : 1982 a, パーソナリティ認知次元の検討 (2)——パーソナリティ特性次元と3気質類型について——, 日本心理学会第46回大会予稿集, 419.
- 16) 若林明雄 : 1982 b, “VERAC-性格検査”の標準化, 日本教育心理学会第24回総会発表論文集, 816-817.
- 17) 若林明雄 : 1985, パーソナリティ類型論の理論的検討 (II)——3気質類型・複合構造モデルとパーソナリティのフラクタル性について——日本教育心理学会第27回総会発表文集, 432-433.